

## 68 「分等」から「等分」への変遷

郭 秀 梅

順天堂大学医学部医史学研究室  
北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室

日中古医籍の処方記載において、薬味の記述後に「各等分」と書くことがよく見られる。これは各薬味の分量が同じことを示す。しかし唐代以前の方書には「分等」しか記されず、「等分」の記載がない。そして「分等」の記述は宋以後の医書において、ほとんど「等分」に変更されている。本報では唐代以前の古医籍記載に基づき「分等」の意味を検討し、さらに、「分等」から「等分」への変遷について考察したい。

江戸時代の森立之は当問題に関し、『本草経考注』の白瓜子条でこう記す。

「[医心方]引[葛氏方]治面多姪、或如雀卵色方桃花、瓜子、分等搗以付面。[外台]引文仲療姪黯方、即此方。而[分等]作[各等分]。」

立之は「分等」が「等分」に変わったことに注目するものの、これ以上は詳論しない。すると、かなりの難問だったと思われる。

唐以前の医学文献では出土資料のほか、『小品方』残卷、『太素』『医心方』に関連の記載が散見される。出土資料を挙げてみよう。

『五十二病方』「一方…白齒、白英、菌桂、枯薑、辛夷、凡五物等已治五物」。

『養生方』「一曰…乾薑、桂、要菴、蛇床、□□各等」。

『武威医簡』「烏喙、赤石脂、貸赭、赤豆、…凡九物皆并治合其分各等合和」。

以上の出土漢代医学文献では、用量が等しい場合に「分等」を使わず、「各等」と記述する。

現存する唐以前の医学文献には次のようにある。

仁和寺本『太素』「伯高曰。用淳酒廿升、蜀椒四升、乾薑一升、桂一升、凡四種、皆咬咀漬酒中。楊上善注。酒椒薑桂四物性熱又洩氣。…咬咀謂調粗細分等也」。

『千金方』「宜与竜胆湯下之、加人參当帰、各如竜胆

秤分等多少也」。

『医心方』『葛氏方』黄連、黄蘗分等搗」「小品方」黄芩、白斂、芍薬三物分等下篩」「千金方」渴不差、可用瓜楼根并牡蠣分等為散」「医門方」治耳痛方。昌蒲、附子分等末、以烏麻油和如泥、取如豆灌耳中、立愈」。

以上の記載から、晋代から唐代の医学文献に「分等」が存在することは明かであろう。特に楊上善の注と「千金方」の「分等」は決して等量の意味ではなく、おそらく「分量」を示すものと判断される。

ちなみに「分等」を定義したのは梁代の陶弘景で、『本草経集注』（敦煌卷子本）に「方有云分等者、非同之分也。謂諸薬斤両多少皆同耳。先視之大小軽重所須、乃以意裁之」と記される。これは「分等」に二種の意味があることの説明である。ひとつは各薬味の量が同じこと、もうひとつは医師の判断で量の多少を決めることである。のち孫思邈は陶弘景の説を踏襲するが、『真本千金方』には「方有云分等者、正是斤両多少皆同等耳」とある。つまり孫思邈の段階では、「分等」

に等量の意味しか伝わらなかったのである。

『千金方』が後世に大きな影響を与えたため、宋代に『千金方』『証類本草』が校刊された時、「分等」が「等分」に書き換えられた。が、見落とされた「分等」も稀にある。この改変時期は特定できない。しかし改変を経ない『孫真人千金方』にも「等分」があるので、すでに唐宋間から「分等」は「等分」に変わり始めていたことが裏付けられる。

以上を要するに、「分等」という言葉が本来の意味で医書に使われた時期は極めて短かった。唐代からは「等分」への書き換えが始まり、宋代ではほとんど「等分」に取って代わられた。ひいては宋代以後、人々が疑問を持たずに「等分」を使い続けた結果、「分等」の本来の意味が追究されることはなかったのである。ここに、「分等」と「等分」は同義語でないことを指摘したい。